

『万葉集』二合仮名における母音挿入規則について

西村康平

要旨：『万葉集』の歌表記に表れる二合仮名には、漢字原音には対応するものない音が第二母音として含まれているが、その現れには当時の日本語の音韻文法が強い影響を与えていると考えられる。本研究では、二合仮名の持つ音韻構造と『万葉集』における出現傾向を分析することにより、その分布の偏りの原因となった母音挿入規則について、「狭母音/i, u/もしくは先行する母音と同一のもの」が選ばれることを示す。また、現代日本語の漢語音韻論との比較を通して、音韻辞書構造の階層構造の成立についても考察する。理論的な説明として最適性理論、特に対応理論の枠組みを用い、二合仮名における第二母音の挿入が普遍的な音韻制約の相互作用の帰結であることを示し、背景にある音韻文法の存在を明確にすることを試みる。

1. はじめに

本研究の目的は『万葉集』の歌表記に表れる二合仮名の第二母音の観察と分析を通して、当時の日本語の音韻文法、特に母音挿入の規則について明らかにすることである。万葉仮名の一形態である二合仮名は、原音(中古音)としては閉音節構造をもつ漢字を、末尾に母音を補うことによって二つの開音節の表記に用いるものである。(1)に『万葉集』に表れる二合仮名の例を示す：

(1) 二合仮名の例

a.	塔：tap → tapu	絶 <u>塔</u> 浪尔	た <u>ゆ</u> た <u>ふ</u> なみに	卷 7-1089
b.	越：wot → woti	越 <u>乞</u> 尔	を <u>ち</u> こちに	卷 6-920
c.	楽：rak → raku	絶 <u>楽</u> 思者	た <u>ゆ</u> ら <u>く</u> おもへば	卷 7-1321
d.	南：nam → namu	和加礼 <u>南</u>	わか <u>れ</u> な <u>む</u>	卷 5-891
e.	君：kun → kuni	嶋 <u>檜</u> 名君	しま <u>な</u> ら <u>な</u> く <u>に</u>	卷 12-3166
f.	鍾：sig → sigu	鍾礼乃雨丹	し <u>ぐ</u> れの <u>あ</u> めに	卷 12-3213

例えば、(1f)の「鍾礼(しぐれ)」という表記は集中に 13 回現れるが、第一字の発音/sigu/の第二母音/u/は漢字原音には相当するものがなく、日本語の表記として読まれる際に補われたものと考えられる。二合仮名は文字数にして『万葉集』歌本文全体の、0.24%を占めるのみであり、万葉仮名の中でも例外的な用法とも言える。出現数としては集中に 76 字種、のべ 316 回を数えられるが、第二母音がどの音であるかには大きな偏りが見られる。特に狭母音/i, u/が多数を占めることが以前より指摘されている(大野 1962、沖森 2000、尾山 2007、2019)。

こうした二合仮名の第二母音における偏りは、当時の日本語における漢字音の発音を反映していたと考えることができ、さらにその背景には、それらを統御する音韻文法の存在を想定すべきである。仮に漢字原音だけが文字選択の情報として重要であり、歌の音韻構造に合わせて任意に選択できるのであれば、第二母音における偏りは発生しづらはずである。しかしながら大きな偏りが存在し、それに音韻文法に起因するものと見なせるのであれば、当時の日本語の音韻文法に統御された漢字音の可能な音韻構造が先に存在し、その範囲内において、二合仮名として歌の表記に用いたと考えることが妥当である。

一方で、この研究では音韻現象を直接観察しているわけではないことには十分な注意が必要である。すなわち、二合仮名それ自体は「漢字をどのように発音したか」ではなく、「すでにある語の発音に対

して、どの漢字ならばその表記として許容されたか」を示すものでしかなく、そこに音韻文法がどの程度反映されているのかは不明瞭である。また、テキストとしての『万葉集』は長期間にわたる、様々な形での歌の収集作業の集積物であると考えられ、歌の筆記者および編纂者のスタイルや嗜好、当時の中国語などの発音および文字に関する知識などには小さくない幅があると考えられる。本研究で採用した歌表記の読みについても正確である保証はない。そうした様々な面における不明確な要素を含んではいることは確かではあるが、開音節言語であった日本語の音韻文法の手がかりとしては、言うまでもなく『万葉集』は最も充実した資料である。新たな研究の可能性を探る意味でも、可能な範囲での分析を行いたい。

2. 二合仮名の分布と第二母音の偏り

本研究では、二合仮名における第二母音の選択において、いくつかの音韻的な条件に起因すると考えられる偏りがあることを、量的なデータに基づいて報告、分析する (cf. 尾山 2007, 2019)。以下の分析では、二合仮名の持つ音韻構造 CVCV を構成する分節音をそれぞれ C1、V1、C2、V2 と表記する。字種によっては C1 は欠く場合もあり、V2 は漢字原音には対応する部分が無い、二合仮名において補われたものである。¹

下記の表(2)は『万葉集』にて二合仮名として用いられる漢字を、C2 と V2 の組み合わせによって分類したものである：

(2) 二合仮名 C2\V2

C2\V2	i	e	a	o	u	計 字種	計 のべ
p	(雑匣) 2/2				(颯塔騰) 3/3	5	5
m	南(瞻) 2/4				兼南濫甘監 險三点覽(敢 金今念藍廉) 15/106	17	110
t	越乞(吉) 3/15			越 1/3	爵薩 2/5	6	23
n	難君万散遍 干(漢丹彈粉 丸) 11/57	(雲) 1/1	信 1/6		敏(讚珍) 3/6	16	70
r	群(信篇) 3/4				駿 1/6	4	10
k	式色伯(拭築) 5/9		(積築) 2/2	極(徳) 2/3	筑各叔幕莫 楽落(福目託 憶作) 12/52	21	66
g	当 1/8		相 1/3	凝(極香) 3/5	鍾香 2/16	7	32
計字種	27	1	4	6	38	76	
計のべ	99	1	11	11	194		316

¹ /i, e, o/における甲類、乙類の違いについては、その音声の特徴や二合仮名における表れに不明な点が多いため、本研究の分析では捨象する。

各マスの数値は当てはまる漢字の字種数およびのべ出現回数である。太字表記はのべ 10 回以上、括弧表記は 1 回のみ出現を示し、赤字表記は V1 と V2 が同一であることを表す。また、のべ出現数の多寡に応じて、マスの濃淡の色分けを行ってある。

前述の通り、補われる母音には狭母音/i, u/が圧倒的に多く、字種数にして約 86%、のべ出現回数にして約 93%を占めるが、その中でも/u/が優勢である。沖森(2000)での指摘の通り、これらの母音は聞こえ度が低く、挿入母音として選ばれやすいという普遍的な傾向に従っていると考えられる。また音声・音韻的な理由は不明だが、集中の二合仮名の V1 には聞こえ度の最も高い/a/が際立って多く、字種数、のべ出現回数ともに約 47%を占める。この点でも個々の二合仮名の音韻構造はV 1 と V 2 の聞こえ度に差が大きいものが多く、相対的に V2 が目立たない構造になっているものが多い。

表(2)の子音 C2 と V2 の関係に着目すると、/m, k/の後には/u/が補われることが多い一方、/n/の後には/i/が圧倒的に多い。この傾向は唇音/p, m/、歯茎音/t, n, r/、軟口蓋音/k, g, (ŋ)/に拡大しても概ね保たれており、字種数の約 64%、のべ出現数の約 80%がそれに従っている。こうした偏りの背景には、挿入の際のデフォルトとなる母音は/u/であるが、歯茎音に後続し音節を形成する場合には、その調音点の影響を受けて/i/が選ばれるという音韻規則が存在し、多くの漢字音がそれに従って発音されていたと推測することが妥当である。

狭母音以外の母音が挿入される例は 11 字種、23 回を数えることができるが、このうちの 8 字種、15 回は V1 と V2 が同一である。開音節化のために、新たな母音を挿入するのではなく、V1 の母音を転用して補ったものとして理解することができる。こうした V1 の転用と解釈できる構造は/i, u, a, o/はあるが、なぜか/e/は一度も現れない。また、C2 が/k/である場合、/u/が補われるもの以外の大部分を占める 7 字種 11 回は、V1 と V2 が同一であり、ここから外れるのは 2 字種の 3 回の出現のみである。これを母音調和の現れ的一端であると解釈することも可能だが、それが他の母音を押しよけるような形で、積極的に行われていたと見なせるような証拠はない。

総合的に見て『万葉集』の二合仮名にて補われる母音については、明確な音韻文法による母音挿入の規則がある背景にあると見なすべきである。これまで見てきた通り、補われる母音としては音韻文法的な裏付けのある「狭母音/i, u/もしくは V1 と同一の母音」がほとんどの二合仮名において選ばれており、また/i, u/の選択においても先行する子音の調音位置の影響がみられる。この傾向から外れるもの、すなわち音韻的に特殊な構造をもつものは、集中には「信/sina/」、「雲/une/」、「香/kago/」の 3 字種の 8 回の出現に限られる。このうち複数回現れるのは「信/sina/」のみであり、全て「信濃」という語の第一字として 6 回の出現がある。また、それ以外の二字も地名表記に含まれるものであり、特殊な構造が許容されやすい環境であるとも言える。²

最後に、巻ごとの出現傾向を下記の表にて示す。巻数における青マスは訓字主体表記、緑マスは仮名主体表記を表す：

²ただし、『万葉集』の歌表記に現れる地名に含まれる二合仮名は、本居宣長が『地名字音転用例』にて分析しているものと比較すると(沖森 2007)、全体としては音韻的に自然な母音挿入が行われている傾向がある。これが韻文であるためか、時代背景などの別の要因によるものであるかは不明である。

(3) 巻ごとの集計

a. 各巻の二合仮名が含まれる語の品詞分類

品詞\巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
普通名詞/代名詞	0	3	4	2	0	2	5	9	0	6	3	3	13	0	0	1	0	0	0	0	51
固有名詞	0	6	19	5	2	12	7	5	8	1	5	4	3	14	3	4	1	1	3	6	109
動/形/副詞	1	0	4	0	0	1	5	0	0	1	11	1	4	0	0	0	0	0	0	0	28
助詞/助動詞	2	2	4	7	5	5	14	3	12	19	29	16	7	0	0	3	0	0	0	0	128
計	3	11	31	14	7	20	31	17	20	27	48	24	27	14	3	8	1	1	3	6	316

b. 各巻の二合仮名における V2

V2\巻	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	計
i	0	4	6	5	1	13	13	3	1	6	16	9	9	0	1	5	0	1	1	5	99
e	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
a	0	2	2	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	5	0	0	1	0	0	0	11
o	1	1	3	0	0	0	1	1	0	0	2	0	2	0	0	0	0	0	0	0	11
u	2	4	20	9	6	7	16	13	19	21	29	15	16	9	2	3	0	0	2	1	194
計	3	11	31	14	7	20	31	17	20	27	48	24	27	14	3	8	1	1	3	6	316

これらの集計からは、二合仮名は主に固有名詞および助動詞で用いられ、巻ごとにもその出現は大きな変動があったことが分かる。また、『万葉集』の筆記形式が大きく変化し、仮名主体表記となる 14 巻以降(16 巻を除く)は、二合仮名は固有名詞以外は用いられていない。V2 が主に /i, u/ であることには変化はないが、それ以外の母音が補われる例については、/o/ は全く見られず、/a/ も「東歌の巻」である 14 巻に大きく偏っている。こうしたことから、『万葉集』が最終的に編纂された時代にあっては、二合仮名はすでに生産的な役割は終えていたと考えられるが、それでもなお、歌の表記としては認められてきたことも事実である。

3. 現代日本語における漢語との比較

これらの特徴と、現代の日本語における漢語の音韻構造(Tateishi 1990, Ito & Mester 1996)との関係は複雑である。現代の漢語において二合仮名に類する CVCV 構造が許されるのは、C2 が /t, k/ である場合のみであるが、V2 として /i, u/ が選択されるという点は類似している。ただし、現代の漢語では /u/ への偏りが二合仮名以上に強く、例えば常用漢字を見ると、/i/ を V2 として持つもの 58 字種であるのに対して、/u/ を持つものは 334 字種と差は大きい。どちらの母音が V2 となるかも、音韻環境からほぼ予測可能である。当然ながら、/i, u/ 以外の母音は V2 としては全く認められない点は、大きく異なる。

また、鼻音 /m, n, ŋ/ の撥音便化および長音化に伴い、多くの字種において音韻的な中和が起こり、元来は「難 /nani/」と「南 /nami/」の様に音韻的に違いが明確だった区別が消失したものも多い。こうした変化は、日本語音韻論が部分的に閉音節を取り入れながら、和語と漢語とでかなり異なる音韻辞書構造を形成していったこと(Ito & Mester 1995ab, 1999)に起因すると考えられる。特に CVCV 構

造を持つ漢字の促音化（例：「学 gaku」、「学校 gak.koo」）も関係し、母音の偏りと固定化が進んだと推測できる。また、既存の母音を転用する形での母音挿入は、「マッハ/mahha/」、「ゴッホ/gohho/」などの一部の外来語の音韻構造とも類似している。

4. 音韻制約の相互作用としての母音挿入

最後に、これまで見てきた二合仮名における第二母音について、理論的枠組みにおいての説明を行い、その背後に明確な音韻文法の影響が存在したことの補足としたい。言語の出力構造を普遍的な制約の相互作用の結果とみなす最適性理論(Prince & Smolensky 1993)の枠組み、特にその中の対応理論 (Correspondence Theory; McCarthy & Prince 1995)において、『万葉集』における二合仮名の大部分にそった形での母音挿入規則を記述するのは容易である。

狭母音/i, u/が挿入母音として選ばれやすいという特徴は、聞こえ度を基準とする母音の普遍的な有標性制約ランキングから導きだすことができる。また母音挿入は、音節末子音を禁止する有標性制約 NOCODA および子音削除を禁止する忠実性制約 MAXIMALITY-IO(C)が、母音挿入を禁止する忠実性制約 DEPENDENCY-IO(V)を支配することで引き起こされる。V1 の転用による母音の補いについては、入力-出力間での一対多の関係を禁止する忠実性制約 UNIFORMITY-IO(V)の違反が許容されることになる。この二つの忠実性制約の支配関係は未決定であり、リランキングが可能である。なお、母音挿入時における母音調和的な効果を説明する際には、そうした構造を要求する有標性制約などを想定する必要は無く、忠実性制約の間の支配関係で説明可能である。以下に制約ランキングと、タブローによる実例を示す：

(4) a. 制約ランキング：

NOCODA, MAXIMALITY-IO(C) >> UNIFORMITY-IO(V), DEPENDENCY-IO(V) >>

*LOWVOWEL >> *MIDVOWEL >> *HIGHVOWEL

b. 狭母音挿入³：「南」 nam → namu

/nam/	NOCODA	MAX-IO(C)	UNIF-IO(V)	DEP-IO(V)	*LV	*MV	*HV
a. nam	*!				*		
b. na		*!			*		
c. →namu				*	*		*
d. namo				*	*	*!	
e. nama			*!		**		

³ なお、狭母音/i, u/のうちどちらかが選ばれるかも、音配列に関わる有標性制約を想定し、C2V2 の連鎖の評価に差を設けることで説明が可能であるが、個々の分節音の詳細が不明瞭であるため、本稿では具体的な例示は行わない。

c. V1 転用 : 「極」 kok → koko

/kok/	NoCODA	MAX-IO(C)	DEP-IO(V)	UNIF-IO(V)	*LV	*MV	*HV
a. kok	*!					*	
b. ko		*!				*	
c. koku			*!			*	*
d. →koko				*		**	
e. koka			*!		*	*	

参考文献

大野透 (1962) 『萬葉仮名の研究』 明治書院

沖森卓也 (2000) 「子音韻尾の音仮名について」、『日本古代の文字と表記』 吉川弘文館、p.263-278.

沖森卓也 (2007) 「古代の地名表記」、『日本古代の文字と表記』 吉川弘文館、p.316-333.

尾山慎 (2007) 「萬葉集における略音仮名と二合仮名：韻尾ごとの偏向をめぐって」、『文学史研究(大阪
市立大学国語国文学研究室)』 47 卷、p.22-31.

尾山慎 (2019) 『二合仮名の研究』 和泉書院

Ito, J. & A. Mester (1995a) “Japanese Phonology.” In *The Handbook of Phonological Theory*, ed. J. Goldsmith, pp. 817–838. Oxford: Blackwell.

Ito, J. & A. Mester (1995b) “The Core-Periphery Structure of the Lexicon and Constraints on Reranking.” *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics 18: Papers in Optimality Theory*, pp. 181–209. Amherst, MA: GLSA.

Ito, J. & A. Mester (1996) “Stem and Word in Sino-Japanese.” In *Phonological Structure and Language Processing: Cross-Linguistic Studies*, ed. T. Otake & A. Cutler, pp.13-44. New York: Mouton de Gruyter.

Ito, J. & A. Mester (1999) “The Phonological Lexicon.” In *The Handbook of Japanese Linguistics*, ed. N. Tsujimura, pp. 62-100. Oxford: Blackwell.

McCarthy, J. & A. Prince (1995) “Faithfulness and Reduplicative Identity.” *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics 18: Papers in Optimality Theory*, pp. 249-384. Amherst, MA: University of Massachusetts, GLSA.

Prince, A. & P. Smolensky (1993) *Optimality Theory: Constraint Interaction in Generative Grammar*. Ms, Rutgers University, New Brunswick and University of Colorado, Boulder.

Tateishi, K. (1990) “Phonology of Sino-Japanese Morphemes.” *University of Massachusetts Occasional Papers in Linguistics 13*, 209-235. Amherst, MA: GLSA.

資料

中西進 (編) (1985) 『万葉集辞典』 講談社

国立国語研究所 (2017) 『日本語歴史コーパス 奈良時代編 I 万葉集』

<https://clrd.ninjal.ac.jp/chj/nara.html#manyo> (2024 年 5 月 16 日確認)

奈良県立万葉文化館 (2023) 『万葉百科』 <https://manyo-hyakka.pref.nara.jp/db> (2024年5月16日確認)

付記

『万葉集』に現れる二合仮名とその関連情報のリストを、筆者の researchmap 「資料公開」 にアップロードする予定である：https://researchmap.jp/koheinishimura/published_works